【編集後記】

後藤新平と「器量人十傑」

大地震・津波・原発事故という未曾有の複合災害に見まわれた日本。かけがえのない万余の命が奪われた。東北を中心とした日本経済が被ったダメージも余りにも大きい。廃業・失業の増加、雇用機会の縮減に加え、節電や自粛、忍耐というマイナス的なムードは、活気や元気という「気」の盛り上がりにつながり難い。

震災後の政権の迷走、主導すべき政治家のリーダーシップの欠如が露わとなった。

ロシアの文豪トルストイの娘、アレクサンドラ・トルスタヤが、米国への亡命の途上、1929 年から 2 年近く日本に滞在し、回想録を残した。そこには、日本人の勤勉さに対する称賛とともに、「何かを決断しなければならない時、日本人は驚くべき優柔不断に陥る」という観察が記されているという。（週刊東洋経済「経済を見る眼」2011.6.11）

今、平成の「後藤新平」が待望されている。後藤新平（1857-1929・医師・台湾総督府民生長官・満州鉄道初代総裁・外相・東京市長等を歴任）は、関東大震災（1923.9.1・M8.2・死者及び行方不明者は 14 万人）の際に、帝都復興院を設立して、復興を手掛けた。

震災翌日の 9 月 2 日、内務大臣に就任した後藤は、自宅に籠もり、「帝都復興」に関する 4 つの基本方針を巻紙に認めた。一、首都は東京以外に移さず　二、復興費用に 30 億円（当時の国家予算の 2 倍超）　三、欧米の都市計画を採用。「燃えない都市」を造営　四、都市計画を確実に実施するため、地主の所有権を一部制限する、等。

9 月 6 日、後藤は閣議に「帝都復興の議」を提出し、独立した機関を設けることを提案、同月 27 日、省庁を横断して権限を行使できる帝都復興院設立が決定、自らその総裁を兼務した。後藤の復興構想は紆余曲折を経ながらも、弟子たちに引き継がれ、東京は、近代都市として蘇生した。

たまたま、最近目にした本に、次のような一節がある。「…戦後、日本人は勉強のできる人、平和を愛する人は育てようとしてきたが、人格を陶冶し、心魂を鍛えることを怠ってきた。なぜ、日本人はかくも小粒になったのか、…全人的な魅力、迫力、実力を備えた人がいない」「善悪、良否の敷居を超えた人間観、その物差しとして、器量がある…」（福田和也『人間の器量』2010）

そして、「器量人十傑」として、時代毎に作者が選んだ「大きい人物」10 人が挙げられている。例えば、【明治】では、1. 西郷隆盛　2. 伊藤博文　3. 勝海舟　4. 大久保利通　5. 横井小楠（幕末の思想家）　6. 渋沢栄一　7. 山縣有朋　8. 桂太郎（3 回組閣・日露戦争を仕切る）　9. 大隈重信　10. 徳富蘇峰（評論家）。【大正～昭和戦前】では、1. 原敬　2. 高橋是清　3. 菊池寛　4. 松下幸之助　5. 今村均（陸軍大将・ラバウル防衛）　6. 松永安左衛門（東邦電力設立・国宝を含む美術収集）　7. 鈴木貫太郎　8. 賀屋興宣（大蔵官僚）　9. 石原莞爾　10. 小林一三（阪急電鉄・宝塚歌劇・東宝）。

無私で高邁な理想、燃えるようなロマンと野望、軍の鬼才、天才経営者、人材抜擢の才、あるいは俗の極み…。様々だが、共通していえるのは、器量とは、善悪や高さ低さでなく、その資質のエネルギーが作用する圧倒的な強さ、広さのように思われる。　（谷　奈々）